

しおんだより VOL.15



地域医療における連携とは、お薬による治療の連携がメインです

この30年ぐらいで、地域医療の在り方は大きく変わっています。以前は、各医療機関は独立して患者さんの治療を行って来ました。しかし、今は違います。

先輩である藤永薬剤師の話を食い入るように聞いている病院研修中の中栖薬剤師（ハザマ薬局）

患者さんのその時々に応じて、大学病院や公立病院、私立でも総合病院のような急性期病院、当院のようなケアミックスの病院、診療所、介護施設など、色々な場所で過ごされます。場合によっては、長期間に亘って、複数の施設を移られながら、治療や療養をされる方も少なくありません。このような時代には、いわゆる「地域医療連携」が絶対に必要で、当院も、様々な医療機関や介護施設と連携させていただいています。その際に必要なのが、どのような病状の患者さんでどういったことが問題で、今回、別の施設に移るのかという情報です。

薬物治療を継ぎ目無く継続するには、病院と薬局の薬剤師同士の連携が不可欠です。そこで、当院では昨年からは薬局薬剤師が1年間の病院研修を行っています。病院・薬局のあり方や考え方を持つことで、患者さんにより良い治療が提供できると実感しています。

当院にも、陰圧装置が設置された病室があります

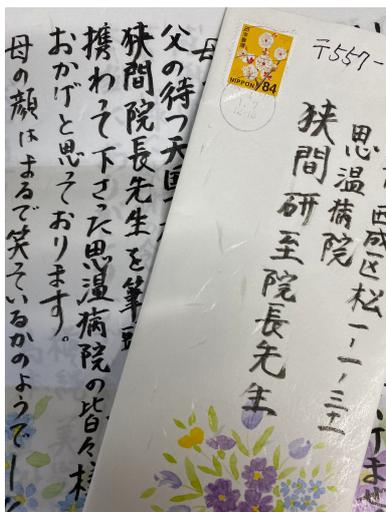
何やら、いかめしい装置の写真ですが、これは部屋の中を陰圧に保つ装置です。感染症の患者さんの治療は日常的に行われていますが、その際に注意が必要なのは、他の患者さんに感染を拡げないことです。

そのために、手指消毒、マスクの着用はもちろん、使い捨てのエプロンや手袋、フェイスシールド、キャップの着用などをいたしますが、より安全性を期すためには、その患者さんのいらっしゃる部屋の気圧を、若干低めに設定しておくことが効果的です。

そうすることにより、廊下から部屋の中への空気の流れが作られ、感染の原因になるウイルスや菌の拡散を防ぎ、院内感染の発生を抑えることができます。



私たちは患者さんやご家族から元気をいただきます！



私が研修医時代（もう、27年前になりますが）、松田暉特別顧問（当時は、私が所属する医局の教授でした）の外来について、勉強させていただく機会がありました。

小児の先天性心疾患の外科手術を広く手がけられていたこともあり、外来には子どもの頃に手術を受け、良くなって退院された後、年に1-2回程度、経過観察に受診に来られる方が沢山いらっしゃいました。

そんな患者さんを診察されたあるとき、ふと私の方を見て「狭間君、僕たち医者は患者さんから元気をもらうんや」とおっしゃったのは、とても印象的でした。

ありがたいことに、最近では患者さんやご家族からお手紙をいただくことも、しばしばあります。

当院では、そういった手術はもちろん行っているわけではありませんが、日々の診療の中で、やはり、患者さんやご家族から元気をいただくんだな、と実感しています。

2022年も、皆さんに、喜んでいただけるよう、院内の職員一同、頑張って参ります。どうぞよろしくお願ひします。

しおんだより 第15号 発行日：令和4年1月15日

発行人：狭間研至 発行元：医療法人嘉健会 思温病院

☎557-0034 大阪市西成区松1-1-31 電話06-6657-3711 HP: www.shion-hp.or.jp